

アーヴィン・ラズロ『叡知の海・宇宙—物質・生命・意識の統合理論をもとめて』（吉田三知世訳、日本教文社、2005年）

Ervin Laszlo, *Science and the Akashic Field: An Integral Theory of Everything*, 2004.

著者のアーヴィン・ラズロ氏は、若き天才ピアニストとして鮮烈なデビューを果たした後、哲学思想や社会科学を学んでシステム論者として名を馳せた学者である。彼の名を世界に知らしめる切っ掛けとなったのは、ローマクラブの報告書「成長の限界」の作成に手腕を発揮したことである。1978年にはノーベル賞受賞者数名を含む全世界の賢者を集めた「ブダペストクラブ」を創設し、地球の将来を見据えた新しい価値観に基づく生き方を提唱しておられる。たまたま、2015年5月に東京の国連大学と富士山麓・野外道場でのSOPPのイベントで、二度お会いする機会があった。野外道場では、舞台上でラズロ氏の直ぐ後ろに立たせていただく幸運に恵まれた。龍村仁監督の映画「ガイアシンフォニー 第5番」で拝見したお姿は、細身でやや華奢に見えたが、実際はかなり大柄で骨太の体躯の方であった。そのとき、相当ご高齢（たぶん83才ほど）であったかと思うが、富士の天地の間に、山麓を吹き渡るやや強い薫風を受けて時おり揺れながら、文字通り大人が直立しておられた。そこで、人類の進むべき指針を謳った「富士宣言」の趣旨が紹介されたのである。

本書は、そのサブタイトルにあるように、「物質・生命・意識の統合理論」、つまり真の「万物の理論」を探究したものである。万物には少なくとも物質と生命と意識（精神）の三領域が含まれ、物質を対象とする自然科学（特に物理学）、生命を対象とする自然科学（生物学・生命科学・医学など）や人文・社会科学、および意識を対象とする人文・社会科学が連携して、物質と生命と意識の三領域を縦断的かつ横断的に包括するような統合理論が目指されている。厳密には、その三領域は互いに重なり合う部分もあるが、伝統的な領域区分に従えば、鉱物の物質現象、動植物の生命現象、人間の意識現象、これらを矛盾なく説明しうる統合理論が探究されているのである。自然科学者の唱える統合理論は、物理化学的現象の説明を基礎としたものが大半を占めるが、ラズロ氏のそれは、精神や文化をも含むものであるから、視野がよりいっそう広く、射程がよりいっそう深いことに留意せねばならない。ラズロ氏は、万物を生み出す根源は、「量子真空」と呼ばれる仮想的なエネルギーの海であるとするが、それを説明する際に彼が着目するのは、エネルギーと情報の二つである。すなわち、物質の最小単位である素粒子やエネルギーの最小単位である量子に関して、それらの相互作用の法則はエネルギーの伝達と変換に基づくものであり、またそれらの相互作用を説明する要素は情報であるという理解である。こうして、エネルギーと情報に満ちた宇宙という概念が本書の根底に据えられ、万物の根源には「相互結合し、情報を保存し、伝達する宇宙場」（ゼロ・ポイント・フィールド [零点場]。東洋の伝統では、アカシック・フィールド）が存在するという革新的な発見に焦点が当てられる。

そのアカシック・フィールドの説明に先立って、科学理論が成立する過程に関して一般的な道筋が述べられる。科学理論が立てられる場合、その理論を使って予測をするが、その予測が観察されたものと一致するか否かで、予測の妥当性が検証される。理論から導かれる予測が観察と一致しない場合は、「変則事象(anomalies)」と呼ばれる。そして、その変則事象をも説明しうる、よりいっそう包括的な理論が目指され、所謂パラダイム・シフトが起きるのである。変則事象こそ、科学の進歩を促進しうるものである。一般に、20世紀の初めにニュートンの機械論的世界観からアインシュタインの相対論的世界観へパラダイム・シフトが起こり、また21世紀に入って科学は新たなパラダイム・シフトを迎えつつあると言われている。旧来のものにとって代わるパラダイムが誕生するとき、そこに含まれる新たな概念は、最初のうちは暫定的に承認された仮説として扱われ、「寓話」のようなものと見られる。しかし、パラダイム・シフトが現実に行きと、その「寓話」と見られた理論が、正規の科学理論として承認されるのである。

現在、宇宙論の領域で寓話段階にある仮説を二つほど挙げれば、まずヒュー・エヴァレットの「並行宇宙仮説」(1955年)がある。何らかの形で観察や測定や相互作用を受けない限り、粒子はそれを取りうる全ての状態の重ね合わせの状態にあり、それはシュレディンガーの波動関数で記述されうる。一つの量子を取りうるすべての状態が、測定または観測が行なわれるときに常に起こっているのであるから、多数の可能な状態は、それと同数の宇宙において実現されている、つまり多数の並行宇宙が存在すると見るわけである。

もう一つは「ホログラフィック宇宙仮説」である。二つの光線により二次元に干渉パターンができる。写真乾板でそれを感光したところにレーザー光を照射すると、対象の三次元像が再現できる。それがホログラフィである。「ホログラフィック宇宙仮説の背後には、宇宙を成り立たせているすべての情報は、宇宙を包む二次元の表面に保存されているという考え方がある。この二次元の情報が宇宙の内部において三次元で現れる」のである。弦理論を扱うとき、四次元よりも五次元の方が扱いやすいので、たとえばブラックホール内部での五次元空間が、実際にはその表面の四次元空間のホログラムだと仮定することになる。要するに、ホログラムとして次元を減らして情報が保存され、全体が部分に縮約されているという基本発想に立つのであり、こうして宇宙の全体が一つの宇宙として存在するとされる。

さて、現代科学の謎(つまり説明できない変則事象)として、ラズロ氏は、(1)宇宙論の謎、(2)量子物理学の謎、(3)生物学の謎、(4)意識研究の謎を順に列挙している。

(1)宇宙論の謎として挙げられたのは、「宇宙の失われた質量」(宇宙には観測される物体の質量の総和で説明される以上の重力質量が存在する。暗黒物質を仮定しても、失われた質量のかなりな部分が説明できない)、「宇宙の膨張の加速」(宇宙の膨張には重力によってブレーキがかかるため、星雲同士が離れる速度は減速するはずだが)、「宇宙の比率の一貫性」

(基本的な粒子の質量、粒子の数、粒子間に働く力は、ある特定の比率が繰り返し現れる)、「地平線問題」(星雲などの巨視的構造物は、地球から見たどの方向においてもほぼ一様に進化していること。相対性理論では「光」より速く伝わる信号は存在しないのだが)、「宇宙の定数の微妙な調整」(調和的な比率が保持され、生命が出現し進化するのに適した条件が繰り返し現れること)などである。ビッグ・バンによる標準宇宙論では、以上のことは説明できない。

(2)量子物理学の謎としては、量子の奇妙な世界が述べられる。エネルギーの塊である量子は、粒子であると同時に波動であり、量子同士が距離に無関係に瞬時に<sup>エンタングル</sup>相関するような非局在的なものである。それらは観測または測定されるまでは、特定の性質を持たず、同時に複数の状態が重なり合って存在する。また、あるパラメーター(たとえば位置やエネルギー)を測定すると、他のパラメーター(速度や観測時間など)は曖昧になる。こうした量子の性質は、従来のニュートン物理学の理論的枠組みでは説明不可能である。

(3)生物学の謎としては、驚くべき一貫性を持った生物と環境の相関に注意が向けられる。古典的ダーウィン主義では、ゲノム(生命体の遺伝子の総体)は生命体のその他の部分が被る変化から遮断されているはずであり、一つの種が何世代も生きていくうちに、体が被る様々な影響とは無関係に<sup>ジェーム・ライン</sup>生殖細胞系(親から子へと伝えられる遺伝情報)はランダムに変化すると主張する。生物の進化は、ゲノムの偶然の変化と、それによって生じた変異体はその環境に適合する偶然という、二重の偶然によって起こることになる。ところが、生物の部分同士、生物の内部環境と外部環境の間には、私たちの想像を超えた一貫性が見出される。人間の身体は毎日六千億個の細胞が死んで、同数の細胞が生まれ、一時間ごとに二億個の赤血球が再生されるような「巨視的な量子系」と考えられている。「新しい生物物理学は、生命体内部、生命体相互、そして生命体と環境との間の根源的な相互結合性についての洞察を基礎にすえなければならない」のである。

(4)意識研究の謎として挙げられるのは、人間意識のトランスパーソナルな世界、すなわち人間精神の連結性である。「私」の意識が他の人々の意識に結びついていることは、先住民による五感を超えた意思伝達の仕方、思考やイメージの転送実験、また<sup>テレソマティック</sup>遠隔身体医療や非局在医療などの出現によって部分的断片的に確認されつつある。他の部分から独立しているという感覚的経験は、一種の錯覚にすぎず、もっと精妙で包括的な「トランスパーソナル」な結び付きがあることが推察されうるが、その詳細は科学的には未解明である。

以上、駆け足で見てきたような様々な謎を解き明かすものとして、ラズロ氏が着眼するものこそが、「量子真空」仮説、つまり「アカシック・フィールド」仮説に他ならない。超高密度のエネルギー場、あるいはホログラフィックな情報場を、宇宙の根源に想定するわ

けである。様々な謎の存在は、実はそのまま謎を解明しうる理論の構築と表裏一体の関係にあると言いうる。「一貫性をもって進化する宇宙、量子の相関性、生体と環境の瞬間的な結び付き、遠く離れた人間どうしの意識が瞬時に交信することなどを成り立たせている、それぞれの結び付きのネットワークはすべて、同じものによって説明できるのである。宇宙には、物質とエネルギーの他に、もう一つ、はるかに精妙だが、実在するものがある。それは、活動的で実際に効果を示す「イン・フォーメーション」としての情報である。この形のイン・フォーメーションは、時間と空間のなかですべてのものを結びつける。」(p.56) ここで言われるイン・フォーメーション (情報) の意味、つまり受け手に「形を与える」という意味は、デイヴィッド・ボームに倣ったものだが、彼に限らず、ニコラ・テスラ (近代通信技術の父、オリジナル・ミーディアム [原媒体] 仮説) やハロルド・パソフなども、自然の領域と精神の領域の両方に於ける相互関係は、この宇宙の中心にある情報場によって媒介されていると考えているようである。



案内役としての小生の役割はここで終了させていただき、後は直接本書をお読みになることをお勧めしたいと思う。本書には興味深い仮説に対する解釈(真空中のねじれ波など)やトランスパーソナル的実験なども紹介されており、とりわけ物質と生命と意識という三領域間の関係についての科学的説明には、検討に値する重要な見解も窺えるように思う。ご参考までに、以下、本書からの引用を幾つか書き留めておきたい。

「全体論的寓話(holistic fable)」(生命体と環境は一つの包括的な系をなしている)に関して、ルパート・シェルドレイクの「形態形成場」仮説に触れながら、「システム生物学と量子物理学が結びついてできた「量子生物学」において、生命体は巨視的な量子系であり、量子系としてすべての細胞や器官を非局在的に結びつけ、他の生命体やその環境と非局在的に結びつけているのである。」(p.121)

先駆的な四つのトランスパーソナル的実験に関して、「A フィールドが、最も直接的で、強烈に、そしてそれゆえ明確に情報を伝播するのは、互いによく似た物(すなわち、基本的な形状が同じで「同形」である物)のあいだにおいてである。これは、A フィールドの情報が、ホログラムに相当する、真空の波の干渉パターンを重ね合わさったものによって伝達されるからである。……A フィールドの中で作られ、A フィールドによって伝達されるホログラムを通して、物は自分に一番よく似た他の物から直接「情報を与えられる(イン・フォームされる)」。(pp. 145-146)

「A フィールドは真空中のねじれ波を通して、宇宙のなかの物や事象を光速の 10 億倍とい

う驚異的な速度で結びつける。ねじれ波の干渉パターンが、宇宙的規模のホログラム、すなわち星やすべての恒星系のホログラムを形作る。これらのホログラムは、私たちの宇宙全体に拡がり、銀河やその他の巨大構造を相互に結びつけている。」(p.146)

「生命の領域で、一つの生命体の分子や細胞のそれぞれのホログラムは、それを包含しているその生命体全体のホログラムと結び付いている（共役の関係にある）。その結果、密やかだが効果的な相互関係が、生命体の分子、細胞、器官のあいだにもたらされ、生命体の内部でほとんど瞬間的に一貫性が成り立っているのである。この共役関係は、分子や細胞が隣同士であろうが、遠く離れていようが、存在している。」(p.150)

「空間は物を分離しているのではなく結びつけているのだという、古くからあった直観的知識に対して、本物の科学的説明が存在することに人々が気づいたとき、現代文明を代表する、新しいものを創造する天才たちは、これを実用に供する方法を見出すであろう。」(p.154) [瞬間的な情報伝達、量子コンピュータ、テレポーテーション]

「結論は明らかである。私たちは個人としては不死ではないが、私たちの経験は不死である。私たちが経験したことのすべては存続し、永遠に思い出されるのである。」(p.226)

「すべてのものは、宇宙の情報場に痕跡を残すことによって存在しつづける。私たち人間も、自分の生涯の経験について、他の人々が読み出すことのできるアカシック・レコードを作る。私たちはこうして一種不死の存在となる。」(pp.227-228)

「前世の体験」は、本当に前世に由来するものとは言い切れない。「永遠の魂の顕現ではなく、永遠の情報の読み出しである、別の形の輪廻転生というものが存在するのである。」(p.229)

「だが、他の人の経験を追体験するとき、私たちはその人に生まれ変わるのではない。なぜなら、私たちの意識にのぼるイメージや想念は、ある個人が死んだ後もその魂が生き残り、それが私たちとして生まれ変わったから生じているのではないからである。」(p.230)

「この真空と一体になることによって不死になるのは、私たち個人としての身体や、個人としての魂ではなく、私たちの個人としての経験なのである。・・・私たちが経験することのすべてが、人類の集団的な記憶装置の一部となるのである。私たちは、現在生きている人々と、未来のすべての世代の人々の、脳や意識のなかで生きつづけるのだ。」(pp.230-231)

本書を出版した時点（2004年当時）では、上掲の引用を見る限り、ラズロ氏は、個人の魂の死後存続や魂の再生を認めていなかったようである。ただし、その後、彼の見解には若干の修正が加えられており、米田晃・前田豊編著『意識科学』（ナチュラルスピリット、2016年）に収録されたラズロ氏の論文「CONSCIOUSNESS—意識」が示すように、意識論がタービン理論（意識は局在的である）・クラウド理論（意識は非局在性である）からホ

プログラム理論（意識は宇宙である）へと理論的な深化を遂げたことが窺える。その転換点は、2014年前後『自己実現する宇宙』(The Self-Actualizing Cosmos, 2014年)、『不滅の心』(The Immortal Mind, 2014年)ではないかと推察される。私たちの個々の意識は宇宙に浸透している意識の一部であり、「宇宙の意識は、それが意識される個人に局在しているが、個々の意識は局在的ではない。」意識は脳に限定されるものではない。人間の意識は「宇宙をイン・フォーム（形成する、情報）する意識の局在化された非ローカルな現われである」という認識である。このような観点から、宇宙の目的や人間の意識の役割が考察されており、偉大な宗教における象徴的表現も再評価されている。

(2021/09/03 棚次正和)